

田中元首相

「マルクスは『階級闘争』と言ったが、世の大半は『同級闘争』である」と喝破した人がいる。会社でも

私の履歴書

弘 康 根 曾 中
ひろ やす ね ぞ なか

24

「同級闘争」と協力と

強固な国家意識で通じる

当然、政界もこの法則の外にはない。田中角栄元首相と私の関係はまさにこれである。同じ大正七年五月生まれ。ともに自我と直感が強く、弁舌をたくましくし、行動的であった。半面、私は海軍、彼は陸軍。初年、先行した。当選直後の民主党総裁選で私は井田均氏を推し、彼は幣原喜重郎氏を支持した。緊急増産のために提議された炭鉱国家管理法案に私は賛成、彼は反対した。

代議士会では双方が立って毎度、大論戦をした。当時、政党内閣は論戦の場でも、弁舌と説得が政治家の仕事であった。根回しと称して裏の話し合いや取引が横行するのは、憲政の伝統からは遺憾である。正直に言って、このころから二人は戦後政界の新人として注目浴びてきたと聞かす。

鳩山内閣による日・国交回復のころまでは、主に野党において吉田内閣と戦った私が国会やラジオの討論会（正面に出て活動し、彼は与党の数の中に埋もれて表面には出ず、事業と政治の双方でひそかに地盤築いてきた。やがて岸内閣ができ、彼は保守本流の中でのめきめき頭角を表し、私は保守傍流で冷や飯を食ひ、続けた。が、派閥の長としては私が五年、先行した。こうした中で昭和四十七年に入る

と、佐藤長期政権の後継問題が浮上してきたのである。当時、人心一新には第一に独力力行の庶民代表として防ごうとした。私に最終的に田中候補を日中国交正常化を条件に支持し、総裁選への立候補を辞退した。第一回投票で田中候補を一位にするためである。その結果、田中候補は大票の差でトップになった。それから十年、鈴木内閣の後継として、私が立候補した時は田中氏が全面的に応援してくれた。同期生の微妙な競争と協力のしからしめたものだろう。

隣近所や町内会の祭り、税務署から交通安全協会にまで気を配り、個人商店を一部上場の大会社に発展させるような処世知の豊かさやさまざまな行動力は、田中氏の得意の場面である。私はそのよきな情の世界より、恩恵を正面に押し立て、参謀の平安を祈るや切である。

（元首相、衆院議員）

役所でも同期生は常に地位を争い、押し分けて生き残りたがります。その一方で、他の期者に対してはかばい合い、同じ期に卓越した者があれば、これを賞賛支持する方向に固まっています。これが日本社会の微妙な文化でもあります。

業と政治の双方でひそかに地盤築いてきた。やがて岸内閣ができ、彼の総裁切符の獲得を目指して「応私を立候補させよう」としていた。それは他派からの草刈り場になるのを防ぐための手段でもあった。

私に最終的に田中候補を日中国交正常化を条件に支持し、総裁選への立候補を辞退した。第一回投票で田中候補を一位にするためである。その結果、田中候補は大票の差でトップになった。それから十年、鈴木内閣の後継として、私が立候補した時は田中氏が全面的に応援してくれた。同期生の微妙な競争と協力のしからしめたものだろう。

隣近所や町内会の祭り、税務署から交通安全協会にまで気を配り、個人商店を一部上場の大会社に発展させるような処世知の豊かさやさまざまな行動力は、田中氏の得意の場面である。私はそのよきな情の世界より、恩恵を正面に押し立て、参謀の平安を祈るや切である。

（元首相、衆院議員）